

鹿児島市における独居高齢者の生活実態について

—高齢者が自立できる社会形成に関する研究—

友清貴和・佐藤洋一

(受理 平成5年5月31日)

A study on the life circumstance of old people living alone in Kagoshima city

A study on the forming society for old people can stand on their own feet

Takakazu TOMOKIYO and Youichi SATO

Thinking of the aging society in Japan one of the most important problems is the increase in the number old people living alone. So we studied to propose some guides to live old people living alone on aging society. First, we did a survey of old people who live alone in Kagoshima city related to their life circumstances. Next, we analyzed and examined conclude their results.

We can understand the following;

- 1) Living near a son has a good effect upon the old living alone.
- 2) Their friendships have nothing to do with their neighbors. And they feel more friendly forward persons who have same hobbies than forward those who live in the same area.
- 3) The protection of their father's family and their graves is a factor that the old living alone live positively or not.
- 4) The older female is more positive than the older male about human relations.
- 5) The old living alone have lifestyles that seem to break loose from all restraints, but they do fundamental actions such is rising, eating, sleeping, etc, at the same time.

Their community has a great influence on the lives of old people living alone. Consequently, we must survey a larger area, and make more a thorough investigation into these problems.

序

わが国の高齢者に対する福祉政策は全く戦後のことであり、敗戦で戦争が終結するまでは近代的な福祉の理念に基づく施策は何もなかった。当時は、わが国において直系父長制の家族制度（「家」制度）に支えられていた絶対君主制の社会国家体制下で、封建的な意識と風習が温存されていた社会のなかにあって、世間体を強く意識しながら極めて閉鎖的な戸主絶対の家庭生活が営まれていた。このため高齢者や心身障害者などいわゆる社会的弱者に関する問題はすべて「家」のなかで処理され、社会問題として浮かび上がることがほとんどなかったため、国はこうした問題に対し、曖昧な政策で対応することができた。

敗戦後、民主化が進むにつれ福祉政策も進められた

が、高齢者問題に対する国の取り組みは立ち遅れていた。それは敗戦前まで強力に維持されてきた「家」制度の育て上げた意識が高齢者側にも、また為政者側にも残存していたことが関係していたと考えられる。

国の高齢者問題への取り組みは昭和38年8月1日の老人福祉法にその端を発することとなる。しかしこの政策も高齢者の立場にたったものではなく、社会的要求への対応として施行されたものであるから、本格的な福祉政策ではなかった。

昭和40年代、社会問題となってきた公害問題による生活環境の破壊の急激な進展によって、政府が高度経済成長政策の転換を余儀なくされた頃から福祉優先の言葉を見聞することが多くなってきた。

ここにわが国の本格的な近代の福祉理念の形成が始まったのである。

1. 研究の目的

わが国の近年の人口の高齢化，高齢人口率の増加についてはよく知られている事実ではあるが，これは決して高齢者の長生きによるものではなく，若年死亡者の減少による老齢に達する人が増加したことが大きな要因となっている。

今後の社会では，高齢人口に達する人の絶対数が急速に増えることから，これまでに類を見ないほどの早さで，社会的対策が要求されることとなる。この問題に対して従来の福祉政策が抱えた「施設政策」に重点をおいて対応しようとする，施設の増設につぐ増設が必要となり，費用の面からも，又施設に働く人員の確保の面からも不可能となる。従って西欧先進国，ことに英国におけるような「居宅処遇」へと福祉政策の方針を転換することが必要となる。

また現在の社会背景にある核家族化の問題から生じる高齢者世帯の増加にも対策を講じなければならない。

今後，高齢者には自立して生活することが望まれてくるであろう。このような社会状況にあつて，かりに高齢者が独居生活を余儀なくされても，健康で快適な生活が確保されなければならない。

本研究は，こうした状況に対応し得る社会形成への方策を見いだそうとするものである。

鹿児島県の高齢者の親族がいる世帯に占める高齢者単身世帯の割合は29.9%で全国1位であり（平成2年・国勢調査），独居高齢者に関して全国的にみても特徴的な地域である。【表-1】

また鹿児島市における独居高齢者も世帯総数に占める高齢者単身世帯の割合は5.7%であり，全国平均4.9%を越えている。（平成2年・国勢調査）

本研究は鹿児島市における独居高齢者に対象を絞り，独居高齢者の生活実態を把握するとともに，今後調査地域の拡大をするための知見を得ることを目的とする。

2. 研究の方法

研究にあたっては，以下のような方法で調査分析を進めた。

①鹿児島市における独居高齢者で生活スタイルに相違が生じると思われる4地区3地域でヒヤリング調査。

本調査においては，一人暮らしである65歳以上の人を調査対象とした。調査対象者については，鹿児

島市役所から各地区の民生委員を紹介してもらい，民生委員から各対象者をランダムに紹介してもらった。【表-2】

②調査結果を地域別・年齢階級別・性別に集計。

調査結果を3つのカテゴリで集計し，分析を行った。

③特性が見られる項目について別集計

調査項目において特徴的なことがみいだせる事項については更に別のカテゴリで集計・分析を行った。

④ ②，③の集計結果を分析し，鹿児島市の独居高齢者がどのような特徴をもつのかを究明した。

3. 調査の概要

調査実施数は68名，そのうち回答を得られたのは52名であった。【表-3】

鹿児島市の独居高齢者の状況¹⁾と本調査のサンプルとの関係は以下の通りである。

①性別にみる鹿児島市の独居高齢者の男女比は14.5：85.5である。本調査では13.5：86.5とほぼ同じ比率であった。

【表-1】各都道府県の高齢者世帯に占める
独居高齢者世帯数の割合

都道府県	%		
北海道	18.2	三重	13.6
青森	12.2	滋賀	10.3
岩手	10.0	京都	18.2
宮城	9.5	大阪	21.2
秋田	9.5	兵庫	18.1
山形	7.3	奈良	13.0
福島	9.8	和歌山	19.0
茨城	9.1	鳥取	12.7
栃木	9.5	島根	13.7
群馬	11.0	岡山	15.0
埼玉	10.4	広島	18.6
千葉	11.5	山口	19.2
東京	20.4	徳島	15.0
神奈川	14.5	香川	15.2
新潟	8.2	愛媛	19.2
富山	8.6	高知	23.2
石川	11.4	福岡	18.2
福井	10.1	佐賀	12.7
山梨	12.4	長崎	19.9
長野	10.5	熊本	16.0
岐阜	9.6	大分	17.8
静岡	9.7	宮崎	20.3
愛知	12.3	鹿児島	5.7
		沖縄	19.7

【表－２】調査対象地域及びその特徴

分割地区	調査地区	特 徴
都市部	天文館	商業都市・繁華街
都市周辺部	西伊敷	新興団地・住宅地
	平 川	農業地域・閑静地
市周縁部	桜 島	高齢人口率が高い

【表－３】調査の集計状況

年齢区分	性別	総数	調査数
65～69歳	男	488	0
	女	3202	9
70～74歳	男	358	2
	女	2778	16
75～79歳	男	389	2
	女	2191	8
80～84歳	男	278	1
	女	1155	6
85歳以上	男	157	2
	女	485	6

【表－４】調査項目及びその結果（単純集計）

調査項目	回答項目	人数	調査項目	回答項目	人数
住居形態	持家持地	40	集会参加	不参加	10
	民間借家	4		老人会のみ	18
	公営住宅	4		老人会+他会	15
	持家借地	4		他会のみ	9
居住年数	0～9年	12	隣人関係	親しい	23
	10～19年	4		まあまあ	10
	20～29年	9		親しい	
	30～39年	6		挨拶程度	17
	40～49年	17		無し	2
	50年以上	4	友人関係	0人	10
独居年数	0～9年	19		1～2人	27
	10～19年	16		3～4人	10
	20～29年	7		5人以上	5
	30～39年	8	就業状況	都市部	4
	40年以上	2		都市周辺部	3
子供との別居距離	徒歩5分以内	2		市周縁部	0
	徒歩15分	8	子供との体面周期	毎日	7
	車30分以内	9		週数回	10
	車60分以内	5		月数回	11
	車60分以上	8		年数回	9
	県外	6		数年に1回	2

②年齢5歳階級別にみると鹿児島市における独居高齢者は高齢であるほどその比率は低減しているが、本調査では70歳～74歳の割合が35.6％と一番高く、そ

他の階級は13.5～19.2％の間ではほぼ均一した割合となった。

③鹿児島市の独居高齢者の平均年齢は74.1歳、本調査対象者の平均年齢は75.5歳であった。

4. 調査項目とその結果（単純集計）

調査項目については、個人的な内容、対人関係、生活内容について調査した。その主な結果（単純集計）を示す。【表－４】

5. 調査結果の分析と考察

調査結果の分析内容は以下の通りであった。

5－1. 個人的な内容

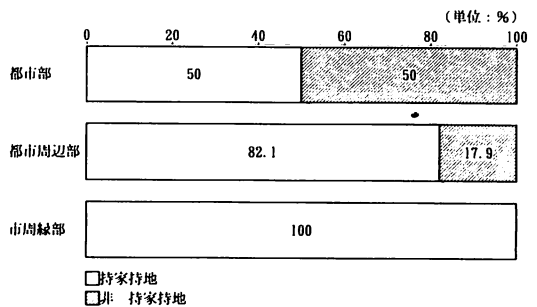
5－2. 対人関係

5－3. 生活内容

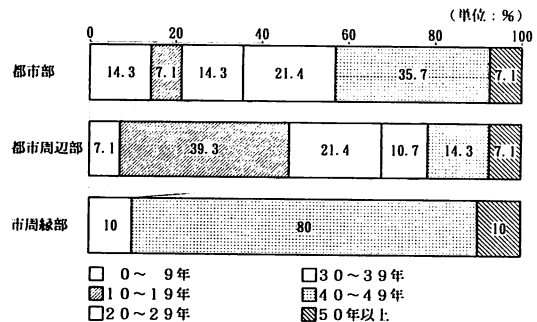
5－1. 個人的な内容

5－1－1. 住居の所有形式

ここでは住居の所有形式を持家持地とそれ以外の非持家持地とに分類した。都心ほど持家持地率は低く、逆に都心から離れるほど持家持地率は高くなっている。【図－1】



【図－1】地域別にみる住居の所有状況



【図－2】地域別にみる居住年数

5-1-2. 住居の居住年数

現住居の居住年数については、都市部及び都市周辺部では平均的にばらつきがみられるのに対し、市周縁部では長年の在住者が多く存在する。【図-2】

一概にはいえないものの、先の「住居の所有形式」と重ねて推測すると、都心部ほど住居に縛られない²⁾生活スタイルが積極的に展開でき、逆に非-都心部ほど住居に縛られた生活スタイルが行われることが考えられる。

5-1-3. 行政及び民間団体からの支援

年金を受けている人49名、生活保護を受けている人3名、家庭奉仕員の派遣を受けている人1名であった。

経済的な支援を受けることが、独居高齢者の生活を支える要因となることが分かる。また独居高齢者の身体に不自由な点が現れたときに、独居を断念せねばならない現状が、家庭奉仕員の派遣状況の少なさからうかがえる。

5-1-4. 就業状況

都市部における就業率は28.6%，都市周辺部における就業率は10.7%，市周縁部における就業率は0%であった。

この就業率に関しては、仕事をすることによって賃金を得る人を対象にしていることから、結果的には都市部ほど就業している人の割合が多くなっている。しかし賃金を得ていないまでも、非-都心部ほど趣味・生きがいとして農業に携わる人が多くみられた。

5-2. 対人関係

5-2-1. 子供との関係

回答者52名のうち、子供がいる人は40名であった。5-2-1についてはこの40名の対象者の回答を基に分析・考察を行う。

I. 子供と生活を送らない理由

子供がいるにもかかわらず、独居を選択している理由をみた結果、回答は大きく3つに分類でき、個人の積極的な意志による独居を「積極的独居」、親族に迷惑をかけたくないという理由による独居を「消極的独居」、家や墓など守るべきものがあるための独居を「保守的独居」と定義した。【表-5】

都心ほど「積極的独居」であり、これには都心ほど「積極的独居」を支援する要因が整っていることが考えられる。また子供との対面周期でみると、対面周期が短いほど「積極的独居」であり、子供との距離が近いという安心感が高齢者を積極的にさせる

要因の一つとなっていることがわかる。後述する親しい友人との関係をみても「積極的独居」である人の友人は多い。【図-3】

つぎに非-都心部ほど「消極的独居」である。独居高齢者が積極的になれない要因が存在することも考えられるが、非-都心部には「守るべきもの」が多く存在しているように思われる。またこれも後に記すが、集会への参加状況をみても「消極的独居」である人のほとんどが集会へ不参加と回答した。

「保守的独居」である人の友人数は最も少なかった。もちろん家や墓を守ることがこの直接的理由とは言えないが、意識的なものとしてどこかで高齢者の生活を抑制しているのではないだろうか。

II. 最寄りの子供との別居距離

都心では〈車行圏内〉³⁾に100%子供が在住しているが、より身近な〈徒歩圏内〉に在住している子供はいなかった。

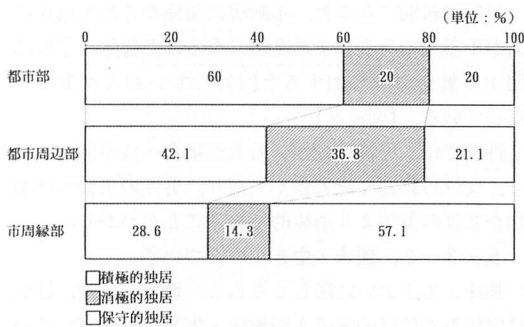
市周縁部では、〈徒歩圏内〉に子供は在住しておらず、車で30分以上かかる場所では子供が生活を送っていた。【図-4】

このことから緊急時の状況を考慮すると、都心及びその周辺部では子供との連絡体制を強化することが必要となり、逆に市周縁部では緊急通報システムといった各種行政・民間機関との連絡体制が必要となる。タクシー会社と独居高齢者宅間で無線によって緊急時の際対応している地域があるが、これは後者の一例であろう。

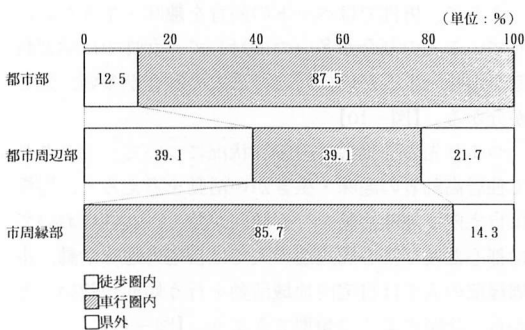
つぎに子供との対面周期をクロスさせて考えると、距離が近いほど対面回数が多くなっている。「毎日対面する」の限界範囲は徒歩15分圏内であり、「週に数回対面する」の限界範囲は車行30分圏内、「月に数回対面する」の限界範囲は鹿児島県内であることが推測される。【図-5】

【表-5】独居高齢者の独居理由

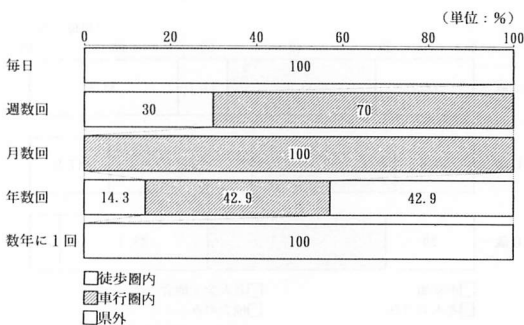
	独居分類	分類内容	人数
独居理由	積極的独居	一人で生活できる	6
		だれにも気兼ねする必要がない	7
		今の地域になじんでいる	3
	消極的独居	子供の経済が苦しい・子供宅が狭い	7
		子供に苦勞をかけたくない	3
	保守的独居	持ち家(本家)だから墓がある	6 4



【図-3】地域別にみる独居理由



【図-4】地域別にみる子供との別居距離



【図-5】対面周期別にみる子供との別居距離

5-2-2. 隣人との関係

都心ほど隣人を親しいと回答している人が少なく、「隣人関係」は希薄になっている。

これは都心ほど若年層が集中しており、高齢者の生活時間帯において、近隣の若年層が就業しているケースが多いこと、また世代間の考え方の相違からうまくコミュニケーションが図られていないことによるものと推測される。

また年齢階級別にみると、独居高齢者は高齢ほど隣人とは親しい付き合いになっており、「隣人関係」に

おいて積極的になっている。【図-6】

性別にみると、男性においては隣人を親しいと答えた人が少なく、挨拶程度の人が半数以上を占めた。逆に女性においては親しいと答えた人が半数以上を占めている。

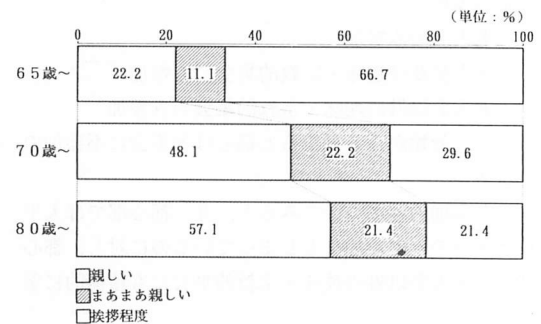
隣人関係においては、女性の方が男性より積極的な付き合いをしていることがわかる。

居住年数とのクロスを検討したが、居住年数に「隣人関係」はほぼ無関係であり、近隣住民における信頼については個々人の性格的要素が大きく関わっていることが考えられる。

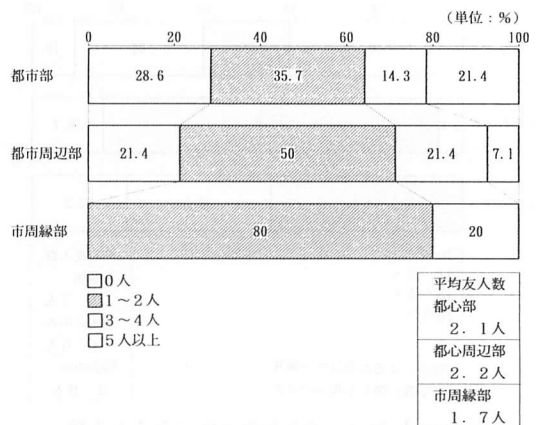
5-2-3. 友人との関係

親しい友人数についてみると、都市部およびその周辺部の20%以上の人が「友人はいない」と回答している。しかしこれらの地区の平均友人数は、「友人がない」と回答した人がいなかった市周縁部の平均友人数より多い。【図-7】

性別でみると女性の平均友人数は2.27人で、男性の0.85人を上回っている。このことから女性のほうが男



【図-6】年齢階級別にみる隣人関係



【図-7】地域別にみる友人数及び平均友人数

性より友人関係においては積極的である。

つぎに集会への参加状況をクロスさせてみる。集会の参加状況をいかに分類するかは「集会への参加状況について」で述べる。この分類方法から友人数をみると、老人会のみ参加している人の平均友人数は、集会に不参加と答えた人の平均友人数とはほぼ同じである。これらに比べると、老人会以外の趣味・宗教活動の集会だけに参加している人の平均友人数は多いことがわかる。【図-8】

先の「隣人関係」と照らし合わせて独居高齢者の友人関係を考えてみると、独居高齢者の友人関係は「隣人関係」にはほぼ無関係であり、さらに言えば独居高齢者は「同じ地域活動の友人」のほうを、より親しく感じていると推察される。

5-3. 生活内容

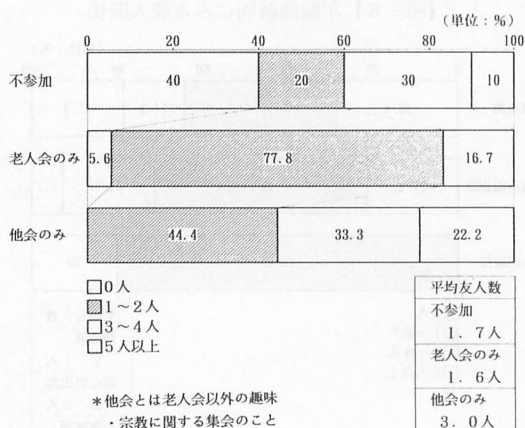
5-3-1. 集会への参加状況について

集会への参加状況については結果を以下の4項目に分類した。

- ①不参加
- ②老人会のみ参加
- ③老人会及び趣味・宗教的集会にも参加
- ④老人会以外の趣味・宗教的集会のみ参加

上記の分類から分析すると都心ほど集会に不参加の人が多い。

また参加内容についてみると、非-都心部では大半が老人会をみの参加にとどまっているのに対し、都心部では老人会以外の趣味・宗教的集会にも積極的に参加している。



【図-8】集会への参加内容別にみる友人数

及び平均友人数

年齢階級別にみると、年齢層に関係なく20%前後の人が不参加である。また高齢になるほど趣味・宗教に関する集会のみ参加すると回答している人が少なくなっている。【図-9】

性別では、男性の42.9%の人が集会へは不参加であり、女性の15.6%を大きく上回り、男性の集会への参加が女性の参加より消極的であることがわかる。

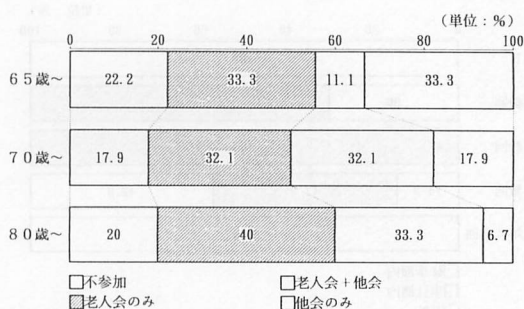
5-3-2. 趣味・生きがいについて

趣味・生きがいに関してみると、地域、年齢、性別に関係なくほぼ90%の人が趣味・生きがいを有している。

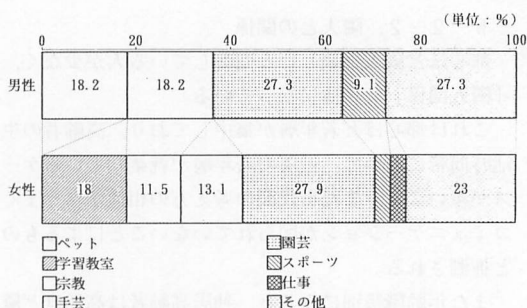
ここで、男性ではペットの飼育を趣味・生きがいにしている人の割合が多いのに対して、女性では学習教室を趣味・生きがいにしている人の割合が多い、ことが分かる。【図-10】

つまり先の「集会への参加状況について」とかさねて独居高齢者の趣味・生きがい活動を考えると、男性は自宅内で趣味活動を行う傾向が強く、女性においては都心部及び都心周辺部の人では自宅外趣味活動、市街部の人では自宅内地域活動を行う傾向が強いことから、次図のように類型できよう。【図-11】

またさらに何か趣味・生きがいをもちたいかという



【図-9】年齢階級別にみる集会への参加内容



【図-10】性別にみる趣味・生きがい

質問に対して、男性は全員が現状のままでよいと回答しているが、女性の60%が何かをもちたいと回答していた。

このことから、女性は男性より積極的に趣味・生きがいを求めていることが分かる反面、現状の趣味・生きがいに関して不満を感じていることも推察される。

さらに趣味・生きがいをもちたいと回答した人に、その持てない理由を尋ねたところ、年齢に関係なく大半が身体的理由を挙げている。市周縁部では近郊にそうした場所がないと答えた人が多くみられた。

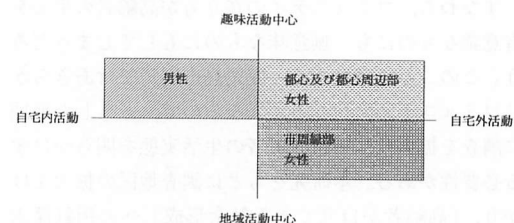
5-3-3. 買い物圏内

買い物を行う範囲をみると、都市部では近郊にものを賄い得る施設が充足していること、市周縁部では賄いができるよう移動販売車が定期的にまわってくることから買い物圏内が徒歩15分以内であり、この中で十分生活を送っていた。

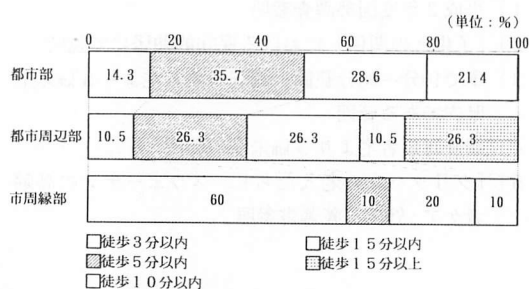
逆に都市周辺部は中途半端な位置であるためか、かえて「買い物圏」は広く設定されており、日常生活に不便さが感じられていた。【図-12】

5-3-4. 経済

一月の経済収支を調べた結果、都市部に近づくにつれ収入金額が増加している。これは都市部ほど家賃・借地代に支出をしている人が多くなっていることが直接の原因だと思われる。家賃を含めない支出状況では、



【図-11】集会ならびに趣味・生きがいからみる地域社会との関連性



【図-12】地域別にみる買い物圏

地域別には余り違いが認められなかった。

性別でみると、男性と女性の大きな違いは交際費となる金額の割合である。【図-13】

5-3-5. 緊急時の対処

緊急時の連絡方法については回答者全員が電話を使用している。その第1通報電話先は子供、隣人、親戚の順となっている。【図-14】

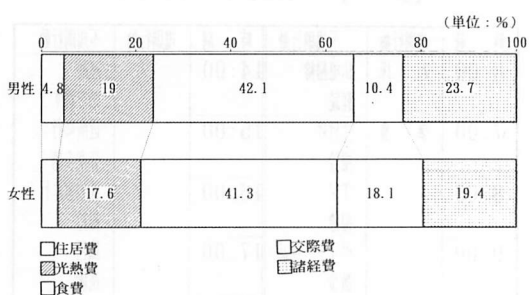
救急車等の行政機関で対処しようとする独居高齢者の意識は低く、独居高齢者の生活は身近な人々の救助によって対処しようとしていることがわかる。

今後独居高齢者の緊急時対策を考慮する際、通報システムが独居高齢者にいかに身近な存在であるかが重要な要因となるだろう。

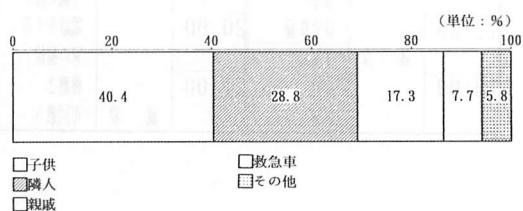
5-3-6. 就寝形態

就寝形態については、各カテゴリーからは特徴的なことが見いだせなかったものの、過去の就寝形態が現在でもそのまま使用されていたことがわかった。

このような状況からみると過去の生活様式の存続が高齢者には適していると推察される。そのことを示す一例として、「スウェーデンの施設で生活を送る高齢者は、現在居住している施設内に自分が過去自宅で使用していた生活用品を持ち込むことで快適な生活を営んでいる」⁵⁾ことが挙げられる。



【図-13】性別にみる経済収支割合（月額）



【図-14】緊急時の第一通報電話先

5-3-7. 生活時間の使い方

1日の生活実態を把握するため時間別調査を行った結果、独居高齢者には地域・性別・年齢に関係なく、ある一定のスタイルを持つことが把握できた。

独居高齢者の生活は「起床」「朝食」「昼食」「夕食」「就寝」という基本事項を実に規則正しく毎日繰り返されている。

その他の行為については、その時の身体・精神条件に支配され臨機応変にその状況に対応せざるを得ないため、その典型的な例を見いだすのは困難である。

【表-6】

これらのことから、独居高齢者には「基本的事項は規則正しく繰り返し、その間の時間は日々自由に過ごす」という生活スタイルがあり、この自由で誰からも束縛を受けない生活が独居のメリットといえるのではないだろうか。

6. まとめ

鹿児島市の独居高齢者の生活内容について特徴を列記すると以下ようになる。

- ①経済的援助が独居生活を支える要因になっている。
- ②子供がいる人はその対面回数、対面周期が独居生活に対する心理側面に影響を与えている。

【表-6】1日のライフスタイル

時 刻	規則行動	不規則行動	時 刻	規則行動	不規則行動
6:00	起 床	仏壇掃除 経読	14:00		運動 畑を耕す
7:00	朝 食	片付け 掃除	15:00		近所に行く 音楽を聴く
8:00		TV 掃除	16:00		孫の家に行く 掃除
9:00		ペットの世話 散歩	17:00		風呂 洗濯
10:00		病院 仕事	18:00	夕 食	夕食準備
11:00		家事 墓参り	19:00		TV 趣味活動
12:00	昼 食	昼食準備	20:00		手紙を書く 電話をする
13:00		TV 片付け 昼寝	21:00	就 寝	家の掃除 歯磨き 布団敷き

③友人関係は隣人関係にはほぼ無関係である。また同じ地域活動の友人より、同じ趣味活動の友人をより親しく感じる。

④独居に積極的か否かは、家や墓といった守るべきものの存在が一因子となって影響を及ぼしている。

⑤対人関係において男性より女性の方が積極的である。

⑥独居高齢者には誰からも束縛を受けない自由な生活スタイルが存在する。しかし基本事項(起床・食事・就寝)については規則正しく行っている。

終

本研究から独居であることの特徴が把握できた。

これらの分析・考察から独居高齢者と行政機関のあいだには「経済的支援」以外に何か密接な関係が存在しているようには思われなかった。しかし独居高齢者の生活は、コミュニティ(地域社会)と大きな関わりが存在しており、逆に言えばコミュニティによる「精神的支援」「物理的支援」がある意味で、独居高齢者が生活を営むときに不可欠な要素となっていた。

「高齢者が自立できるための社会形成」のためには、高齢者自身に行政が直接的な施しをする一方で、コミュニティが間接的にはたらくことが重要なこととなる。

すなわち、コミュニティの在り方が高齢者の生活を有意義なものにも、無意味なものにもしてしまうだろう。このことを考慮すると鹿児島市周辺ではあきらかにコミュニティの在り方が異なるので、そうした地域に調査を拡大し、独居高齢者の生活実態を明らかにする必要がある。本研究をもとに調査地区の拡大をはかり、「高齢者が自立できる社会形成」への指針探求を図る。

【注記】

- 1) 平成2年度国勢調査参照
- 2) 「子供との関係」における保守的独居にて説明
- 3) 車で10分～90分範囲。調査対象者宅より3 km以上県内である範囲
- 4) 調査対象者宅より3 km未満の範囲
- 5) 「クリッパンの老人たち」 スウェーデンの高齢者ケア; 外山 義著書参照